

発達段階	中学校(1年)	教科等	理科	
タイトル	地震(海洋型地震)発生のメカニズム			
実施日(月日)				
所要時間	10分	15分	15分	10分
展開	導入	展開		まとめ
達成すべき目標	日本が地震多発国であることを知る	震源分布の特徴を知る	地震発生のメカニズムについて知る	地震発生のメカニズムに関する科学的な知識
生成物	地震という自然現象に対する興味と日本が地震多発国であるという知識	立体分布図となぜそのようになるかという興味	地震とプレートの関係についての知識	海洋型地震についての知識
作業単位	全体			
進め方	・世界の震央の分布を使い、震源の分布が海洋の周辺部、高い山脈のあるところに多いことを確認する。 ・海洋中央部にも帯状に分布しているのがなぜかを考える。	日本付近の震源分布図と同じ大きさの亚克力板を数枚用意し、震源の深さごとに亚克力板及びマークする色を変えて震源の位置を記入し、できあがったものを重ねる。	できあがった震源の立体分布図から日本では太平洋側から大陸側に震源が深くなることを確認し、プレートにたまったひずみと地震の関係について学ぶ。	地震発生メカニズムとプレートテクトニクスの考え方の関係を理解し、地震に対する科学的な知識を身に付ける。
ツール(準備物)	教科書	プリント、亚克力板、油性ペン	教科書	教科書
場所	教室			

発達段階	中学校	教科等	保健体育			事後の指導
タイトル	応急手当の意義と手順を学ぼう					
実施日(月日)						
所要時間	5分	10分	10分	15分	10分	・「意識がない場合の手当」について、実習する。 ・「きずの手当て」について(止血法、包帯法等)実習する。
展開	導入	話し合い・作業	話し合い	実習	まとめ	
達成すべき目標	応急手当の必要性を知り、学習への意欲をもつ	応急手当の手順をグループで話し合い、意見をまとめる	各グループで考えた手順を確認し、正しい手順を理解する	災害場所(地震)での周囲の状況や傷病者の観察、通報の仕方をグループで練習する	応急手当の意義を理解し、その手順を習得する	
生成物	応急手当の意義の理解と学習への意欲	応急手当の手順を書き込み完成させたワークシート		災害場所(地震)での周囲の状況の把握、傷病者の観察や通報の仕方の習得	応急手当の意義・手順の理解及び活用への意欲	
学習単位	全体	グループ	全体	グループ	全体	
進め方	応急手当の必要性を知る。 ・苦痛を和らげる ・悪化を防ぐ ・回復を早める等を確認する。	応急手当の手順について意見を出し合う。 ・周囲の状況 ・傷病者の観察 ・手当 ワークシートへの書き込み	各グループの発表 補足説明 ・各グループの発表への付け加え ・迅速な対応を行わなかった場合、生命に危険が及ぶこと	応急手当の手順を確かめる。 ・周囲の状況の観察 ・場所の安全、協力者の有無 ・傷病者の観察 ・大出血の有無 ・意識の有無 ・呼吸の有無 ・循環のサインの有無 通報の仕方を確かめる。(ロールプレイング) 2人1組で実習する。	ロールプレイングの成果を発表する。 本時の感想を書く。	
ツール(準備物)		ワークシート(個人用・掲示用)				
場所	教室					

応急手当の意義と手順を学ぼう

年 組 氏名 _____

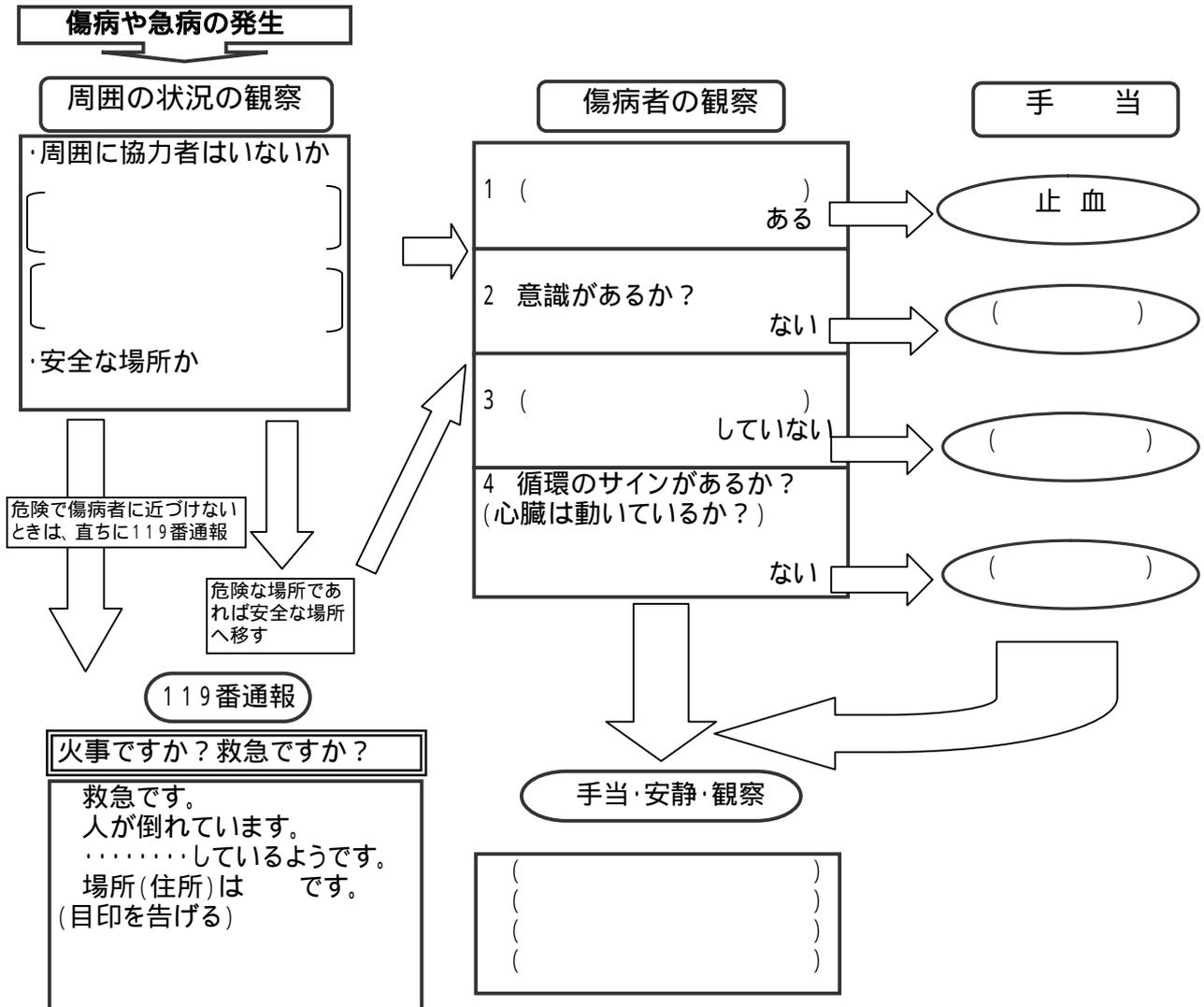
1. 応急手当の意義

生命にかかわるようなけが人や病人が出て、()あるいは()による本格的な救命活動
ないし()活動に引き渡すまでの()的、()的な救命処置である。

生命に危険がある場合は、より迅速な対応が求められる。

・応急手当はなぜ必要か。() () () () () ()

2. 応急手当の手順



3 地震災害にあった場面を想定して、周囲の状況や傷病者の観察、通報のしかたの練習をしよう。
周囲の状況(家屋の倒壊、家屋の火災、津波等)
傷病者の様子(大出血がある、家屋の下敷きになっている、津波で溺れている等)

4 まとめとして
今日の学習でわかったこと

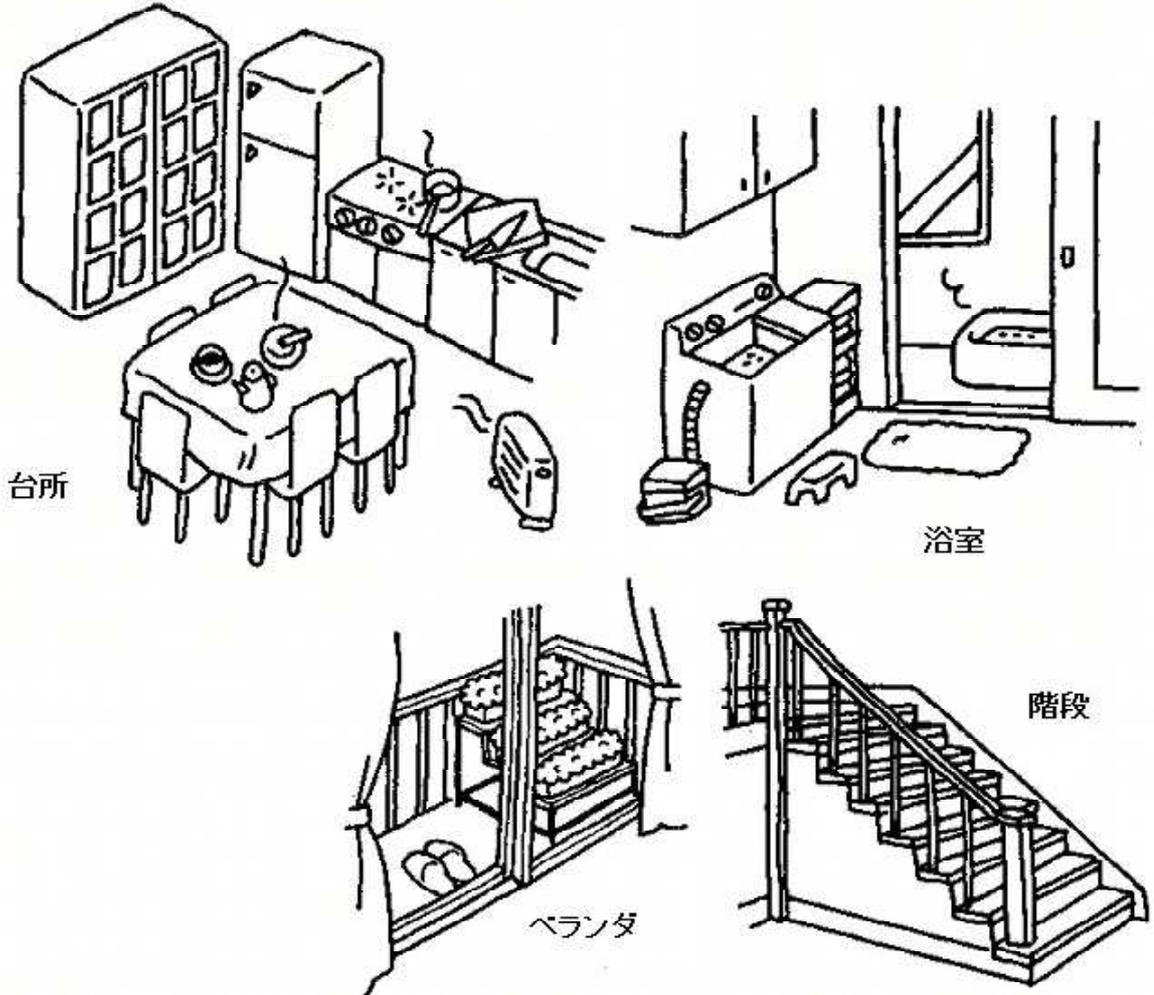
今日の学習で感じたこと

発達段階	中学校	教科等	技術・家庭					
タイトル	家のつくりと安全性を考えよう							
実施日(月日)								
所要時間	10分	10分	5分	15分	10分	30分	20分	
展開	導入	展開			まとめ	疑似体験	まとめ	
達成すべき目標	住まいの中の危険について考える	家庭内で起きる事故の種類とその原因を知る	災害に対する被害を軽減させる方法を理解する		日頃から震災に対する備えを行う	だれもが安心して暮らせる住まいを考える	安心して暮らせる住まい、災害時の共助について考える	
生成物	住まいの中での災害に対する予測	家庭内で安全に住むための室内環境の条件の理解	自然災害に対する予防の意識		震災に対する予防の意識	住まいの中の危険についての理解	ノーマライゼーション社会の実現に寄与する態度	
学習単位	全体				グループ		全体	
進め方	住まいの中には、どのような危険があるだろうか、いろいろな立場の人のことを考え、意見を出し合う。	・厚生労働省『人口動態統計』「家庭内死亡事故率」グラフから、家庭内の事故の原因を考える。 ・家庭内で起きる事故の防ぎ方や安全管理の仕方を理解し、安全な住まい方の工夫を考える。	自然災害があったとき、被害を少なくする住み方について考える。	地震のときに住まいの中で発生する被害に対して、具体的な対策方法を知る。	家の周りを点検し、家の外の震災対策について具体的な方法を知る。	・高齢者の疑似体験をし、使いにくい場所や危険な場所はないか、チェックする。 ・高齢者にとって安全な住まいはどんな住まいかを考える。	・幼児の目の高さになって、住まいの中の危険なところをチェックする。 ・安心して暮らせるために、どのような工夫ができるか考える。	・地域の幼児や高齢者、身体の不自由な人の避難について、どのような助け合いができるか、考える。 ・ユニバーサルデザインを取り入れた、災害に対して安心して暮らせる住まいを考える。
ツール(準備物)	ワークシート					シルバー体験用装具 ワークシート		
場所	教室				教室・廊下・実習室・校庭		教室	

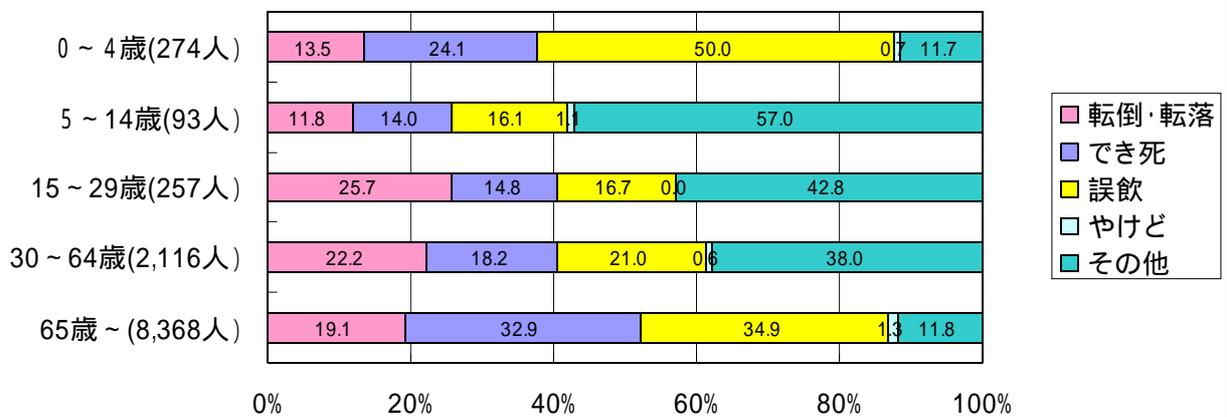
家のつくりと安全性を考えよう

年 組 氏名 _____

1. 住まいの中にはどのような危険があるだろうか？



家庭内死亡事故における死亡者数と事故原因の割合



(厚生労働省「平成 14 年度人口動態統計」)

2. 住まいの中の震災対策

家の中の危険をなくそう。

落下・転落防止対策

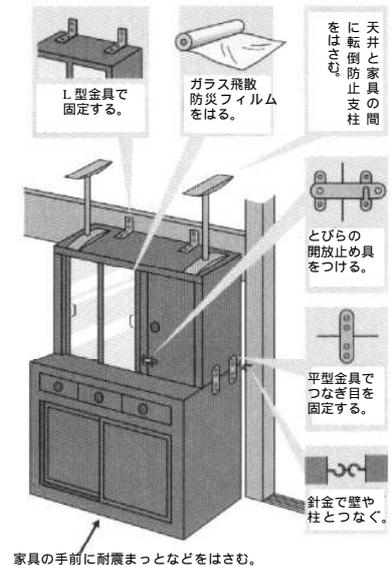
- ・家具の上や高いところに()を置かない。
- ・家具は、壁や柱にぴったりとつけて置き、()などで固定して転落を防止する。
- ・家具の手前に()をはさむ。

身の安全対策

- ・寝室や子ども・老人の部屋には()を置かない。
- ・窓や戸棚のガラスには、()フィルムを貼る。

火災防止対策

- ・火元のまわりは()する。
- ・カーテンや壁材はなるべく()のものを使用する。
- ・ガス器具は、使用后、()と()を閉める。



技術・家庭〔家庭分野〕開隆堂より

3. 家の周りの危険をなくそう

わが家の耐震チェック！

わが家の()をしよう。

- ・建築された時期は？
- ・地盤は強い？弱い？
- ・建物の基礎は？
- ・壁の配置は良い？
- ・建物の形は？
- ・建物の維持管理がしっかりされている？

わが家の()をしよう。

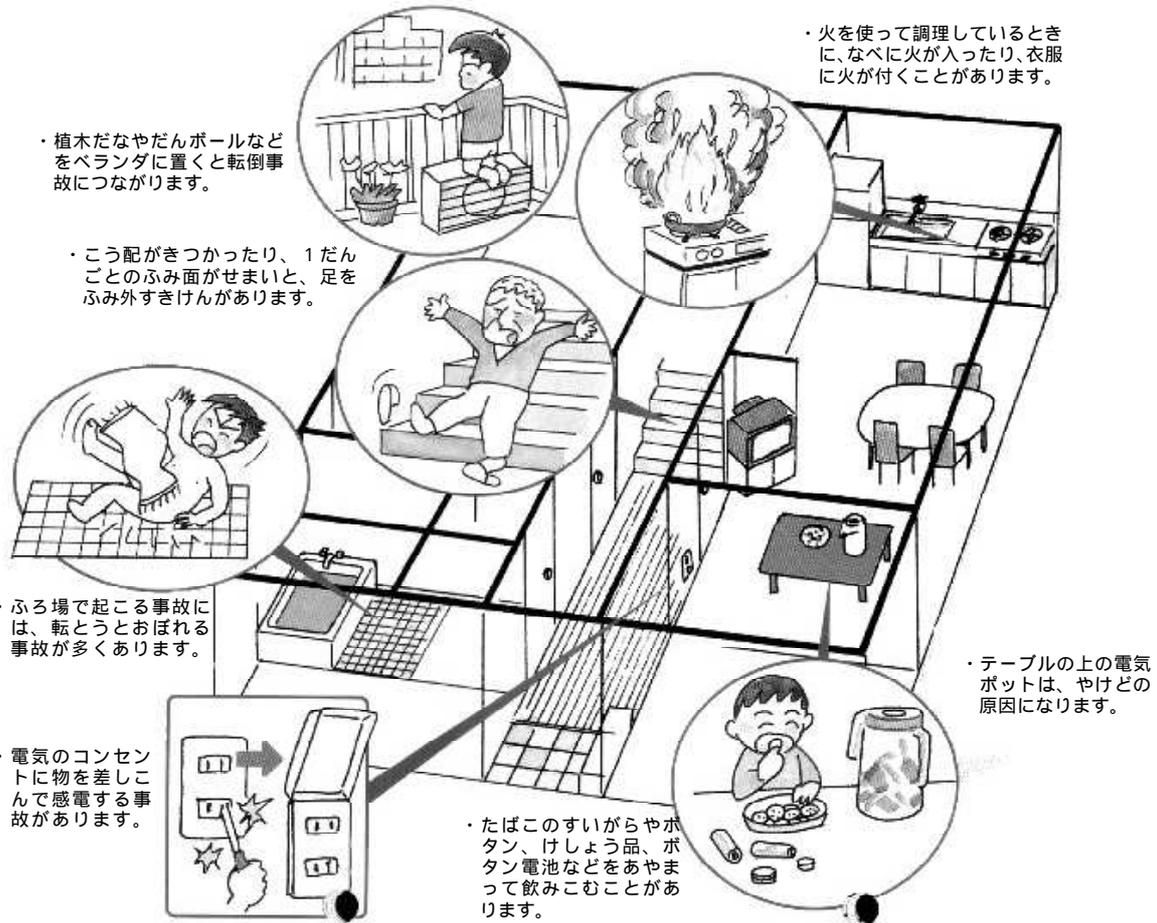
家の周りの危険をなくそう。

- プロパンガスのボンベは、しっかり固定しておこう。
- ブロック塀や石垣の崩れは、補強しておき、風に倒されないようにしよう。
- 屋根瓦の点検をしよう。
- テレビアンテナは固定しよう。
- 樋の掃除をして水が流れるようにしよう。
- 溝の掃除をして水が流れるようにしよう。
- その他

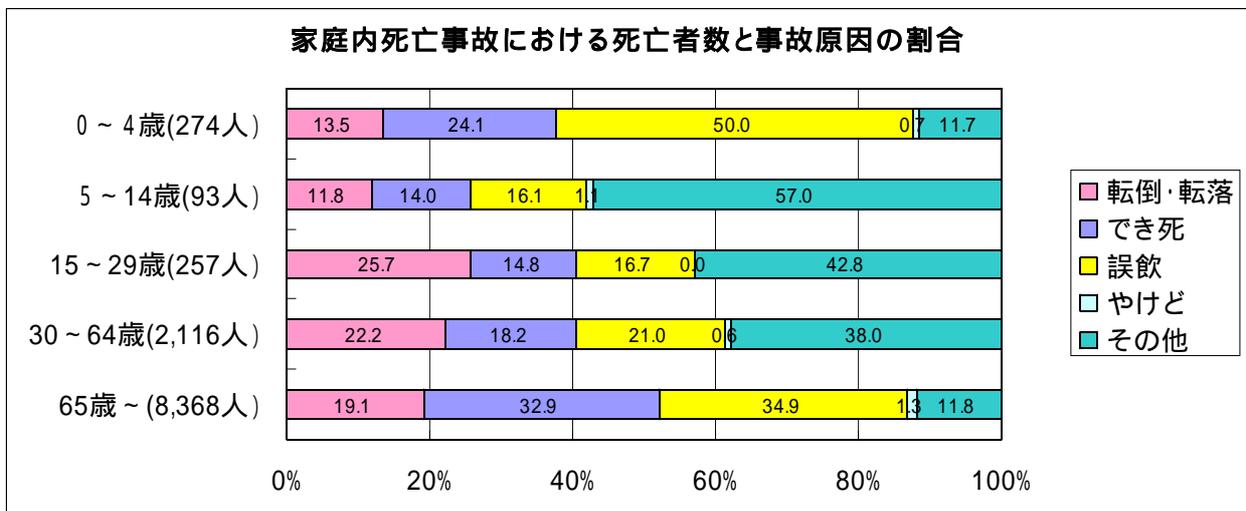
家のつくりと安全性を考えよう

年 組 氏名 _____

1. 住まいの中にはどのような危険があるだろうか？



住まいのくふう 〔株〕全図教より



(厚生労働省「平成 14 年度人口動態統計」)

2. 住まいの中の震災対策

家の中の危険をなくそう。

落下・転落防止対策

- ・家具の上や高いところに（重いもの）を置かない。
- ・家具は、壁や柱にぴったりとつけて置き、（L字金具）などで固定して転落を防止する。
- ・家具の手前に（マット）をはさむ。

身の安全対策

- ・寝室や子ども・老人の部屋には（大きな家具）を置かない。
- ・窓や戸棚のガラスには、（飛散防止）フィルムを貼る。

火災防止対策

- ・火元のまわりは（整理整頓）する。
- ・カーテンや壁材はなるべく（防災加工）のものを使用する。
- ・ガス器具は、使用后、（器具せん）と（ガスせん）を閉める。

3. 家の周りの危険をなくそう

わが家の耐震チェック！

わが家の（耐震診断）をしよう。

- ・建築された時期は？
- ・地盤は強い？弱い？
- ・建物の基礎は？
- ・壁の配置は良い？
- ・建物の形は？
- ・建物の維持管理がしっかりされている？

わが家の（耐震改修）をしよう。

家の周りの危険をなくそう。

プロパンガスのボンベは、しっかり固定しておこう。

ブロック塀や石垣の崩れは、補強しておき、風に倒されないようにしよう。

屋根瓦の点検をしよう。

テレビアンテナは固定しよう。

樋の掃除をして水が流れるようにしよう。

溝の掃除をして水が流れるようにしよう。

その他

誰もが安心してらせる住まい

～家の中や学校内に使いにくい場所や危険な場所はないでしょうか～

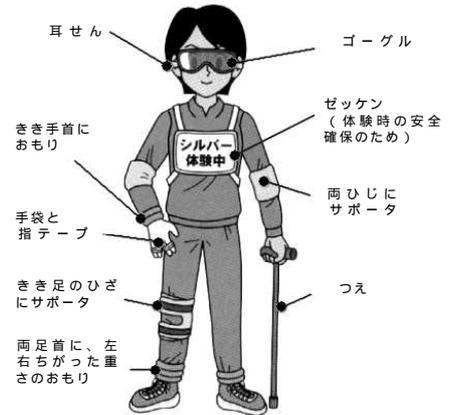
年 組 氏名 _____

シルバー体験

～高齢者にとって安全な住まいはどんな住まいなのでしょう～

観察記録用紙

体験者	1名	
介助者	1名	
観察者	1名	
記録者	1名	



技術・家庭〔家庭分野〕開隆堂より

観察記録

疑似体験をして感じたことは。

疑似体験をして、使いにくい場所や危険な場所は。

高齢者にとって安全な住まいはどんな住まいか。

チャイルド体験

～ 幼児の立場に立って、住まいの中の危険なところをチェックしてみましょう～

幼児の特徴

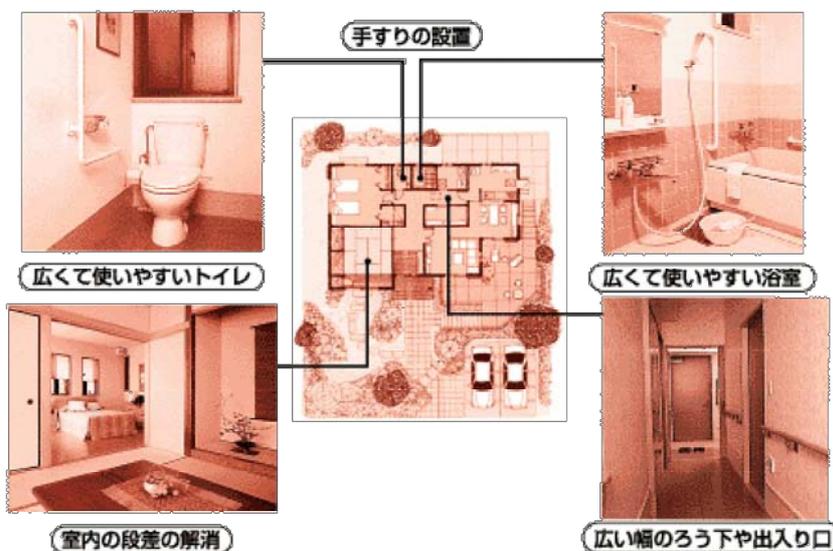
- ・ 視界が低い。
- ・ 体が小さい。
- ・ 活動が活発。
- ・ 何にでも興味を示す。



どんな工夫ができるでしょう。

新編 新しい技術・家庭 家庭分野 東京書籍より

ノーマライゼーション社会の実現 ～ だれもが安心して暮らせる住まいを考える～
住まいのバリアフリー



安全な住まいを考えよう 住宅月間実行委員会より

バリアフリーからユニバーサルデザインへ

ユニバーサルデザインの7原則

- だれにでも公平に使える。
- 多様な使い手や使用環境に対応し、使う上での自由度が高いこと。
- 使い方が簡単ですぐにわかる。
- 必要な情報がすぐに理解できる。
- 間違いにくく失敗や危険につながりにくい。
- 無理な体勢をとることなく、少ない力で楽に使える。
- 使いやすい大きさと空間が確保されている。

発達段階	中学校	教科等	特別活動			
タイトル	地震災害に備えて					
実施日(月日)						
所要時間	5分	10分	10分	15分	10分	事後の指導
展開	導入	話し合い・作業	話し合い	発表	まとめ	
達成すべき目標	学習の目的を確認する	大地震による被害から教訓を導き出す	各グループで考えた教訓を確認し、地震発生時の行動や備えについて話し合う	各グループの発表を通して、行動のしかた、備えについて確認する	地震が発生したときの行動のしかたと日ごろからの備えを理解し、適切な対応ができる	・感想等による学習内容理解の確認 ・応急手当の意義と手順
生成物	学習目標の確認と学習への意欲	過去の大地震の被害から導き出された教訓		地震災害時の行動マニュアルと非常用持ち出し物品リスト	適切な行動の理解	
学習単位	全体	グループ	グループ	全体	全体	
進め方	過去に起こった大地震から、どのような被害が起こるか学ぶ。 ・家屋の倒壊 ・家具の転倒、落下 ・火災の発生 ・津波の発生 ・地割れ 等	被害に対する教訓について意見を出し合う。 ・家屋の倒壊に対して ・家具の転倒、落下に対して ・火災の発生に対して ・津波の発生に対して ワークシートへの書き込み	教訓から考えられる行動の仕方を出し合う。 被災後の必要な生活用品(非常用持ち出し物品)を出し合う。	各グループの発表を聞くとともに、経過時間に伴う行動の仕方について確認する。 ・自分の身を守る ・火の始末 ・安全確認 ・周り、近所の安否確認 非常用持ち出し物品の確認をする。 ・飲料水、食料(缶詰、カンパン、レトルト食品)、ラジオ、懐中電灯、救急用品等	本時の学習のまとめをする。 本時の感想を書く。	
ツール(準備物)		ワークシート(個人用・掲示用)				
場所	教室					

地震災害に備えて

_____年 _____組 氏名 _____

1. 過去に起こった大地震でどのような被害が起きましたか。考えてみよう。

ア	
イ	
ウ	
エ	
オ	

2. 被害に対する教訓を考えよう。

ア	
イ	
ウ	
エ	
オ	

3. 地震が発生したときの時間の経過に伴う行動の仕方と日ごろからの備えについて下の表に書き入れよう。

経過時間	行動すべきこと	日ごろからの備え
地震発生～2分		
2～5分		
5～10分		
10分～半日		

4. 非常用持ち出し物品を確認しよう。

5. まとめとして
今日の学習でわかったこと

今日の学習で感じたこと

地震災害に備えて

年 組 氏名

1. 過去に起こった大地震でどのような被害が起きましたか。考えてみよう。

- ア 家具の転倒・落下、ガラスの破損・飛散 等
- イ 家屋の倒壊、電柱や看板などの転倒 等
- ウ 火災の発生
- エ 津波の発生
- オ 地割れ

2. 被害に対する教訓を考えよう。

- ア 机の下などに身をかくして、座布団などで頭を保護する 等
- イ 避難経路の確認 等
- ウ すばやく火を消す、ガスの元栓を閉める、ブレーカーを落とす 等
- エ 海岸近くの人はずぐ高台に避難する 等
- オ

3. 地震が発生したときの時間の経過に伴う行動の仕方と日ごろからの備えについて下の表に書き入れよう。

経過時間	行動すべきこと	日ごろからの備え
地震発生～2分	自分の身を守る	・家具の転倒、移動防止 ・ガラスの破損、飛散防止 ・照明器具の落下防止
2～5分	火の始末 消火のチャンスは3回 揺れを感じたとき 大揺れがおさまったとき 出火の直後	・バケツ、消火器の準備 ・風呂水のくみ置き
5～10分	わが家の安全確認 ・被害の状況 家族の安否確認	・家族で防災会議 ・あらかじめ家族で決めておいた場所に集合
10分～半日	周り、近所の安否確認	周り、近所の協力体制づくり ・防災市民組織への参加

4. 非常用持ち出し物品を確認しよう。

飲料水、食料(缶詰、カンパン、レトルト食品等)、ラジオ、懐中電灯、乾電池、救急用品
なべ、細ひも、タオル、ロープ、ナイフ、下着などの衣類、携帯電話等

5. まとめとして

今日の学習でわかったこと

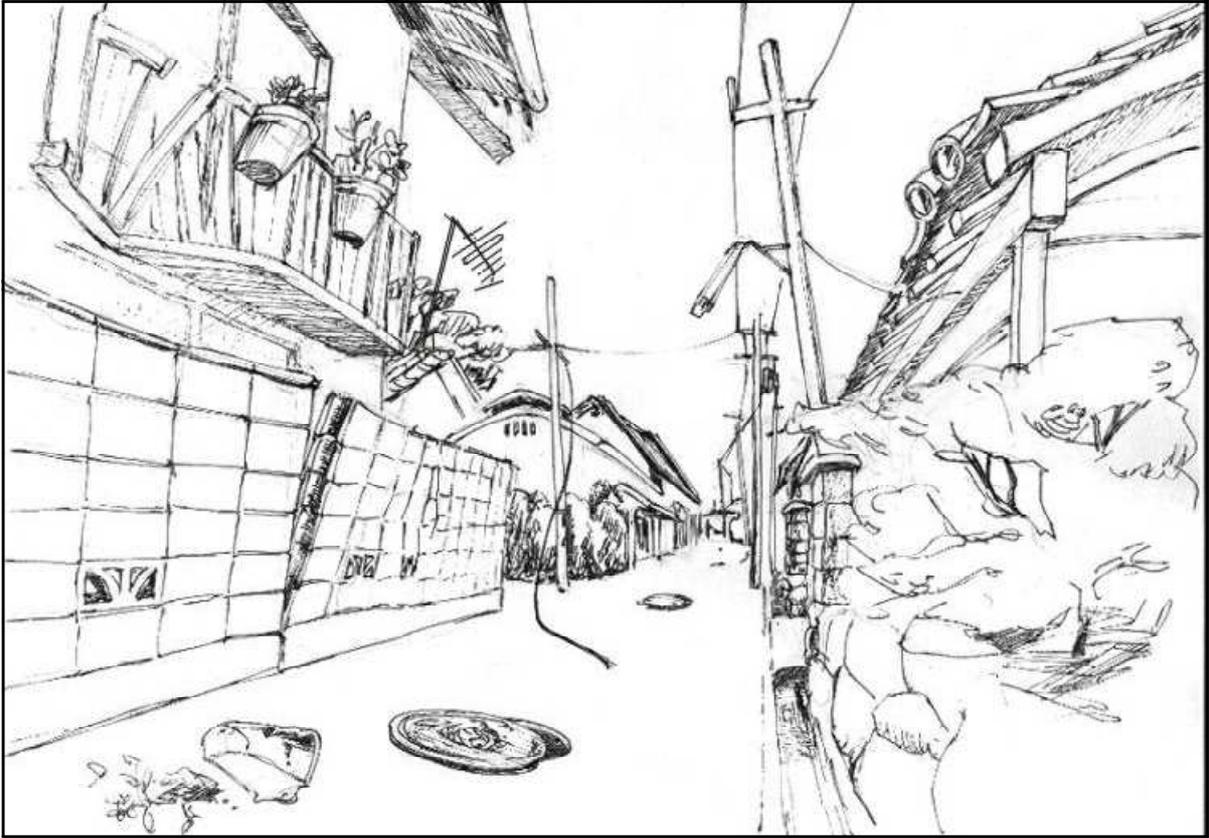
今日の学習で感じたこと

発達段階	中学校	教科等	特別活動									
タイトル	地震による災害への対応や共助の大切さについて考えよう											
実施日(月日)												
所要時間	10分		5分	10分	20分		5分					
展開	導入		展開(課題の明確化)		展開(課題解決に向けての話し合い)		まとめ(自己目標の設定)					
達成すべき目標	液状化現象の実験を通し、地震災害に対する意識を高める		<ul style="list-style-type: none"> ・奈良県が被害を受けると想定されている地震について理解する ・奈良盆地内では、液状化現象が起こることを理解する 		<ul style="list-style-type: none"> 大規模地震発生時の様々な被害や実態について理解する 		<ul style="list-style-type: none"> 災害に備え、準備の必要なことや、今の自分たちにできることについて考える 		<ul style="list-style-type: none"> みんなで話し合った中から、自分の生活を踏まえて今の自分できることを考え、実行しようとする意欲をもつ 			
生成物	地震災害や防災への意識の高揚		県内の地震被害想定調査結果の概要の理解		大規模地震による被害状況の理解		<ul style="list-style-type: none"> ・災害に対する対応力の深化 ・共助の大切さの理解 		主体的な防災への意欲の高揚			
学習単位	グループ		全体		グループ		グループ		全体			
進め方	液状化現象の実験を行い、その状況を観察する。 1 ペットボトルに、洗いたての砂を約7～10cm入れる。 2 その際、ピンポン玉やマル画鋸を砂の中(比較的浅い部分)に埋める。 (*砂に含む水の量が少ない場合は、水を足して、しっかり混ぜる。水が表面に浮かないようにすることが大切！) 3 乾電池を表面にたてる。(少しの振動で倒れないように少し埋める。)		1秒間に数回のペースで、ペットボトルをたたき、振動を与える。(ペットボトルが移動したり、倒れたりしないよう、上から軽く押さえる。)		・ビル等の建物に見立てた乾電池は、砂の中に沈み込む。 ・水がしみ出すとともに、配管やマンホールに見立てたピンポン玉、画鋸が表面に浮き上がってくる。		液状化以外にも起こる地震災害の様々な状況や被害について知る。 例えば、落下物、建物の崩壊、交通網の寸断、通信手段の寸断、ライフラインの寸断等		地震災害の様々な状況に対して、どのように対応すればよいかを各グループで話し合い、発表する。 次のような視点を大切に、話し合いを進めたい。 ・災害に備えて今から準備をする必要のあること、また、そのうちで今の自分たちにできることを考える。 ・災害には、一人で対応するのではなく、みんなで連帯して対応することで、その被害をより小さくすることができる。この「共助」という視点から、災害への対応を考えていくことの大切さについて確認し合う。 ・一人一人が地域や社会の貴重な防災力となることを自覚する。		地震への備えにかかわり、自己目標をもつ。 実践意欲を高めるために、点検カードを一人一人が作成し、友達や家族とともに実践できるようにすると効果的である。 なお、事後指導として、点検カードをみんなで確認し合う機会も設けていきたい。	
ツール(準備物)	1グループあたり ・ペットボトル(2リットル)の上半分を切り取ったもの(切り口で、指等を切らないように、ビニールテープを貼る) ・洗いたての細かい砂(バケツに入れておく) ・単1乾電池1本 ・ピンポン玉1球、マル画鋸(マップ画鋸)数本 ・水 ・ぞうきん		奈良県学校地震防災教育推進プラン(防災計画編)						点検カード			
場所	教室等		教室		教室		教室		教室			

発達段階	中学校	教科等	特別活動
タイトル	地震の危険予測		
実施日(月日)			
所要時間	5分	45分	10分
展開	導入	ビデオ視聴	説明
達成すべき目標	本時の目標を理解し、防災を意識する	地震災害についての意識を高める	本時の内容について理解し、被害を軽減させようとする意識を高める
生成物	防災に対する意識	阪神・淡路大震災の被害状況についての知識	地震発生時における危険を予測し、回避する能力を高める
学習単位	全体	全体	作業
進め方	阪神・淡路大震災について知り、身近なところで大規模地震が起こったことを認識する。	VTR「激震の記録」を視聴する。	発表・まとめ
ツール(準備物)		VTR「激震の記録」(朝日放送株式会社)	各グループの発表をとおし、的確に危険予測することが、身を守ることを確認する
場所	教室または視聴覚教室等		危険予測の方法についての理解 ・作業に対する意欲
			「危険予測のスキル」のワークシート
			危険予測と回避する能力
			全体
			グループ
			全体
			前時に視聴した地震災害の状況を思い起こしながら、作業内容について理解する。
			「危険予測のスキル」ワークシートを使い、各グループで話し合う。様々な場面や状況の中で、どのような被害が起きているか。どのような危険が予測されるか。危険を回避するにはどのようにすればよいか。 (*グループで話し合う場面を指定し、展開してもよい)
			「危険予測のスキル」ワークシート
			各クラスで話し合った内容を発表し、どのような危険があるか共通理解し、その回避の仕方について理解する。様々な危険を回避するには、的確な危険予測が不可欠であることを知る。
			教室

場面 1

あなたは地震発生の後、歩いて避難しようとしています。



このイラストから、どのような被害の様子が読み取れますか。

.....

.....

.....

どのような危険が予測できますか。

.....

.....

.....

その危険を避けるにはどのようにしたらよいでしょうか？

.....

.....

.....

場面 1

あなたは地震発生の後、歩いて避難しようとしています。

ブロック塀 ベランダ 電線 アンテナ マンホール 瓦 植木鉢

このイラストから、どのような被害の様子が読み取れますか。

ブロック塀にひびが入っている。左側の家のバルコニーが壊れている。

電線が切れている。アンテナが倒れている。

マンホールの蓋がずれている。瓦が落ちている。

どのような危険が予測できますか。

ブロック塀が倒れる。バルコニーが崩れてくる。

切れて電線で感電する。アンテナが落ちてくる。

マンホールに落ちる。瓦が落ちてくる。

左の植木鉢が落ちてくる。

その危険を避けるにはどのようにしたらよいでしょうか？

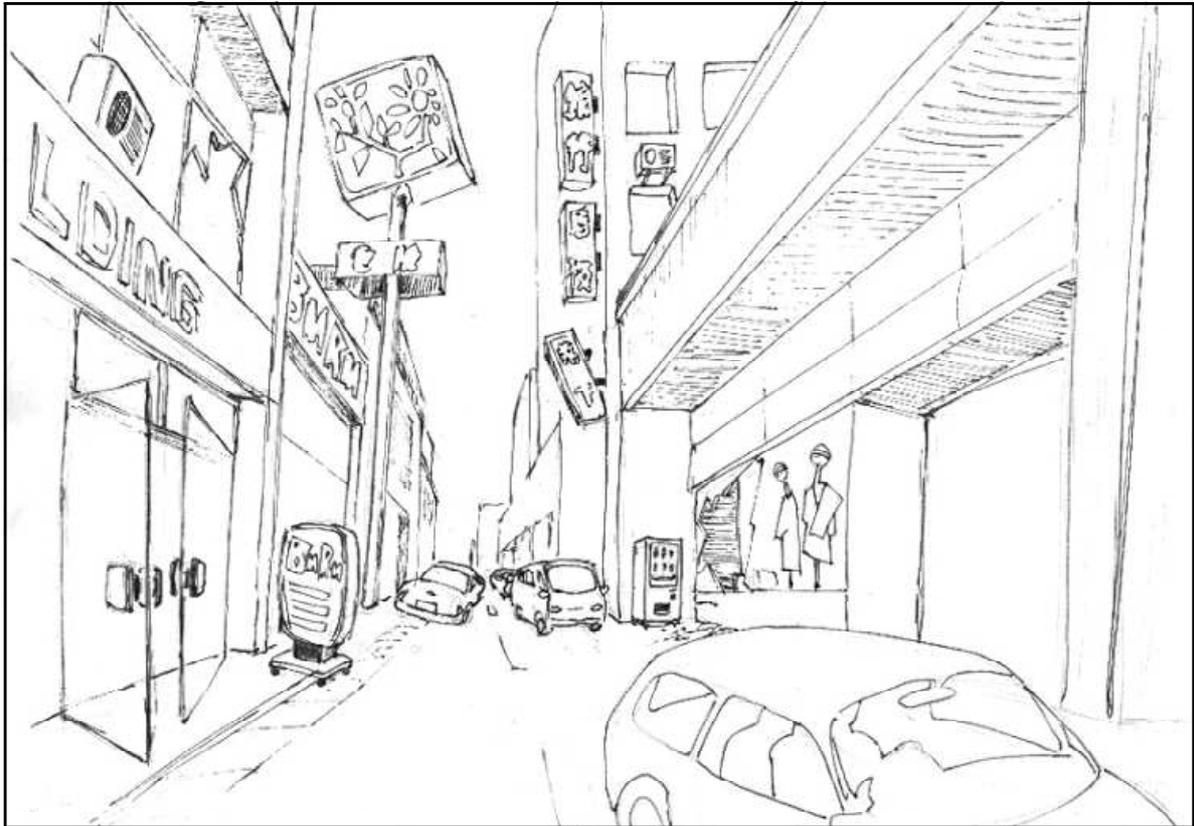
まわりの状況を確認しながら足もと頭上に注意して逃げる。

交差点での安全確認を忘れない。

狭い道路などを使って避難しない。

場面 2

あなたは地震発生の後、歩いて避難しようとしています。



このイラストから、どのような被害の様子が読み取れますか。

.....

.....

.....

どのような危険が予測できますか。

.....

.....

.....

その危険を避けるにはどのようにしたらよいでしょうか？

.....

.....

.....

場面2

あなたは地震発生の後、歩いて避難しようとしています。

看板 エアコンの室外機 ショーウインドウ 外壁タイル 車での避難
ガラス張りのビル 自動販売機

このイラストから、どのような被害の様子が読み取れますか。

エアコンの室外機がずれている。 看板が落ちかけている。

ショーウインドウが割れている。

どのような危険が予測できますか。

エアコンの室外機が落ちてくる。

看板が落ちてくる。 ショーウインドウが割れて、ガラスが落ちてくる。

左のビルがガラス張りなら割れて落ちてくる。

地震の後、車で避難すると緊急自動車の邪魔になる。

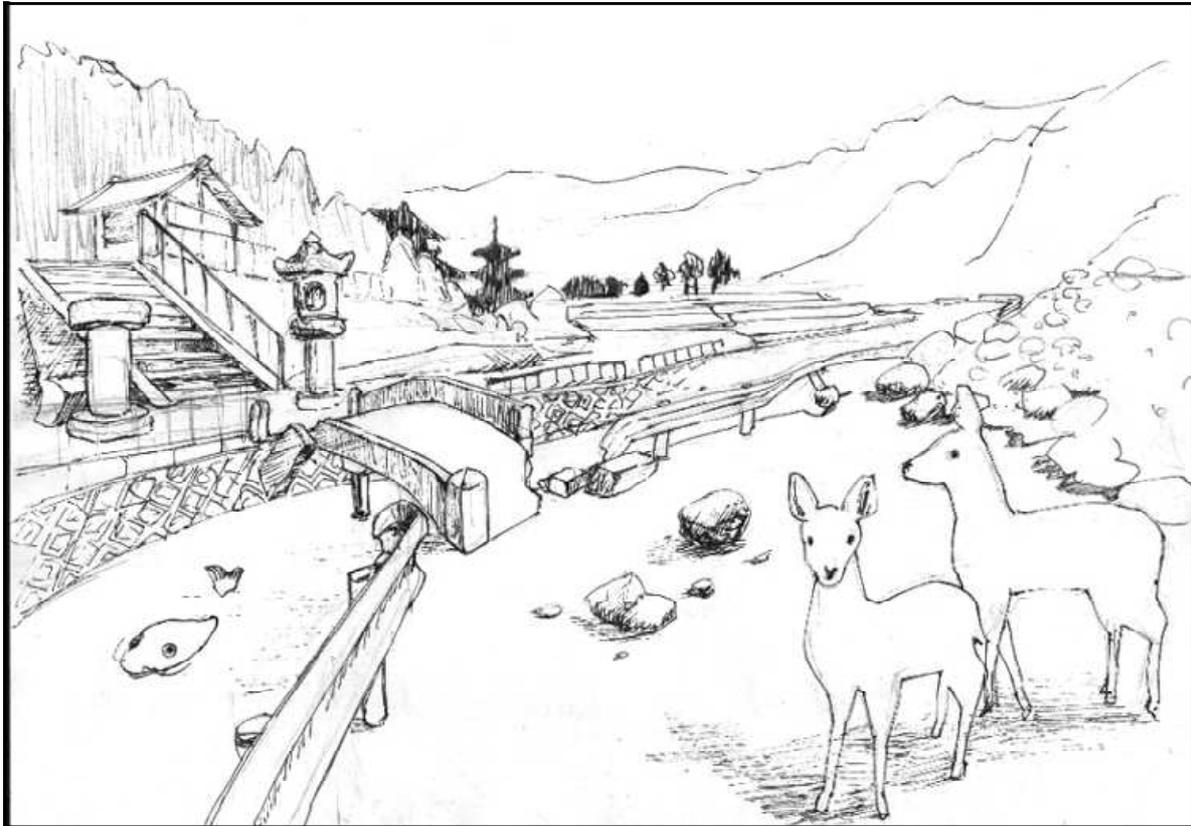
その危険を避けるにはどのようにしたらよいでしょうか？

上から落ちてくるものに注意しながら避難する。

避難に車は使わない。

場面 3

あなたは地震発生の後、歩いて避難しようとしています。



このイラストから、どのような被害の様子を読み取れますか。

.....

.....

.....

どのような危険が予測できますか。

.....

.....

.....

その危険を避けるにはどのようにしたらよいでしょうか？

.....

.....

.....

場面3

あなたは地震発生の後、歩いて避難しようとしています。

地割れ 山崩れ 橋の破損 灯籠の倒壊 落石

このイラストから、どのような被害の様子が読み取れますか。

灯籠が崩れている。 橋が落ちかけている。

落石がある。 土砂崩れが起きている。

どのような危険が予測できますか。

灯籠が倒れる。 橋が落ちる。

落石にあたる。 土砂崩れに巻き込まれる。

その危険を避けるにはどのようにしたらよいでしょうか？

危険が予測される場合には無理に避難せず、安全な場所で待機することも必要。

発達段階	中学校	教科等	特別活動			
タイトル	避難生活の中で助け合って暮らす知恵と工夫について考えよう					
実施日(月日)						
所要時間	10分	20分	20分	50分	40分	10分
展開	導入	作業・話し合い		話し合い	発表(ポスターセッション)	まとめ
達成すべき目標	避難生活の状況を理解し、その中で取るべき行動について考える	地震災害で避難する状況になったとき、人が生存するために何が必要かを考える	多くの人が避難している状況の中で起こり得る問題点について考える	避難生活を送る上で課題となることについてグループごとにテーマを見つけ、その解決のために必要なことを調べ考える	避難生活という極限に近い状況での自分たちの行動のしかたや考え方について、グループで話し合ったことを学級の全員に伝える	各グループで話し合った事柄が、一人一人の力となり、実際の場で生かされるようにする
生成物	課題を自分に引き寄せて、現実に関わり得る問題としてとらえる態度	衣食住・ライフラインなど、日常生活で意識に上らないものに目を向ける姿勢	集団の中で求められる課題の明確化	グループ討論による各自の考えの深化	・発表用フリップ ・他のグループからの質問による新しい視点	避難生活は、極限に近い状況であることを理解しながらも、それを、知恵と工夫、思いやりと協力によって乗り越えられるという自信
学習単位	全体	グループ	グループ	グループ	グループ	全体
進め方	・阪神・淡路大震災のVTR等により、被害状況や避難生活の様子を実感する。 ・自分たちがそのような状況に置かれた場合を想定し、どのような行動が求められるかを考える。	・グループで自由に話し合いながら、人が生存するために必要なものや条件を出しあう。 (物だけでなく、人と人との関わりなど、心を支えるために必要なものも含めて考えさせる。)	・生活に必要なものが不足することによって、どのような問題が出てくるのか、また、どうすることが必要なのかについて意見を出し合う。 ・ワークシートにまとめる。	・グループごとにテーマを決め、(例えば、みんなが公平、平等に過ごせるためのチーム作りや役割分担、ルールづくり、また、避難生活を快適にするための身近な材料での避難所グッズの作り方、廃材による火おこし・炊事など)グループで話し合い自分たちでできることを見つけ、アイデアや方法について考える。 ・話し合った内容をフリップにまとめる。	・グループごとのテーマについて考え、まとめた結果を発表する。 ・疑問点などについての意見を交換する。	・発表(ポスターセッション)の時に論点となった事柄について、自由な意見を出す。 ・各グループの発表について全体で話し合い、それぞれのよいところを評価する。また、実際の避難生活を体験した人々の手記など現実の内容とも重ねながら考える。
ツール(準備物)	阪神・淡路大震災の映像資料(主に避難生活の場面)	ワークシート	ワークシート	フリップ	発表用フリップ	避難生活者や避難所のボランティアリーダー等の手記
場所	教室(体育館で、実際の避難所生活を想定しながら行うのもよい。)					

*話し合いの場面で出された内容から、計画、アイデア、方法等を基に実践する場を設けた指導も考えられる。

避難生活の中で助け合って暮らす知恵と工夫

(グループで話し合おう)

地震災害後、ケガもなく無事であったが、余震の心配や、家が壊れるなどの理由で、学校に避難した場合を想定して、次のことを考えよう。



人が1日、生きるためにどうしても必要なものって何？

・「もの」やエネルギー

・「もの」以外に必要なもの

学校には何人の人達が集まるのだろうか？

- ・一つの学年に 人の生徒がいるなら、中学校の校区の人口は約何人？
- ・校区の人達の半数が被災して、中学校と校区内の小学校合計4校に分かれて避難するとしたら、1校当たり何人が避難しにやってくる？
(奈良県人口約140万人、県内中学生(国公立)4万2千人)

何千人の人達が体育館に集まったら……

- ・まず、すべきことは何だろう。
役割、ルール、連絡方法をどうするか。(学校行事等の経験を生かして考えよう。)

避難が何日にも及ぶ場合、どのような問題が起きてくるだろうか？

避難生活をより快適に過ごすための工夫は？

発達段階	中学校	教科等	特別活動		
タイトル	阪神・淡路大震災で避難所となった小学校の記録から、ボランティアリーダーたちの行動に学ぼう				
実施日(月日)					
所要時間	10分	20分	20分	30分	20分
展開	導入	展開(資料の読み取りとグループ討議)		展開(グループ討議のまとめ)	グループごとの発表及びまとめ
達成すべき目標	阪神・淡路大震災とはどのようなものであったのかを知り、地震の脅威を感じ取る	阪神・淡路大震災で避難所となった小学校の、震災直後3日間の記録を読んで、災害時の状況や、人々がそれぞれに果たした役割、働きや思いやりの気持ちを読み取る	3日間の記録の中から、公助を待つ間の、自助、共助の大切さを感じ取り、自分たちに何ができるかを考える	様々なケースを想定し、その中で自分の役割やできること、また、どのようなことでリーダーとして働くことができるかについて考える	他のグループが考えたことを聞き、自分の理解や考え方の幅を広げる
生成物	震災直後の映像記録から学び、防災について考える意欲	地震直後の状況と人々の心の状態や行動の理解	自分もつ力を発揮しようとする意欲	助け合い、ボランティアなど、自分たちにできることに対する自信	災害時、避難時の幅広い対応力
学習単位	全体	全体	グループ	グループ	全体
進め方	・多くの家屋が崩壊し、続く余震への恐怖の中、避難所生活をせざるをえない状況を感じ取る。	・ほぼ1時間刻みで表された避難所の記録から地震災害の大きさを理解し、人々の行動を見る。 ・避難者自身の助け合いや思いやりによって避難所生活が成り立つことに気付く。	記録の中から、 ・様々な問題が起きる避難所生活の中で、ボランティアリーダーが生まれ、自治組織づくりが進んでいくことなどに気付く。 ・グループ分け、名簿づくりなど避難生活者の組織的な動きやそれを進めるボランティアリーダーの働きから学ぶ。 ・他県からのボランティアなどの存在に気付き、共助の大切さを知る。	・中学生として災害時にどのような役割を果たすべきかを話し合い、すべきこと、必要なことを挙げる。 ・自分たちが被害者でない場合には、どのようなボランティアができるかを話し合い、すべきこと、必要なことを挙げる。 ・ボランティア活動の具体的な進め方、方法を考える。	・グループで考え、まとめた内容を発表する。 ・他のグループの発表を聞くことにより、具体的なボランティア活動を進めるための発案、企画、依頼、分担、連絡、調整など、実際的な方法について幅広く知る。
ツール(準備物)	阪神・淡路大震災の映像資料	資料1 阪神・淡路大震災後避難所となったある小学校の記録(兵庫県教育委員会「震災を超えて」より)			
場所	教室				

(阪神・淡路大震災で避難所となった小学校の記録から、ボランティアリーダーに学ぼう)

災害時に学校の果たす役割

阪神・淡路大震災(平成7年1月17日未明に発生)では、学校施設が多くの人々の避難場所として大きな役割を果たした。1月23日には、1,150か所の避難所に約32万人が避難したが、このうち、公立学校への避難者数は約18万人で、避難者全体の約6割を占めた。

地震発生が夜明け前であったため、県や市の災害対策本部の設置には時間を要した。寒さと引き続き起こる余震の恐怖から、人々のほとんどは、避難所として指定されているか否かにかかわらず、広くて安全そうな場所に避難し、結果的に学校施設、特に小・中学校に集中することとなった。

このように住民の避難は行政の勧告や誘導によるものではなく、自然発生的に行われたが、被害が甚大であったため、避難所に指定されていた学校等にはあらかじめ想定されていた人数をはるかに上回る避難者が集中した。災害対策本部が設置され避難所としての指定や追認が行われるまでには、1日ないし数日を要した。この対応の遅れが避難所運営に大変な困難をもたらした。場所によっては大混乱が生じた。

こうした状況の中で、学校や教職員が果たした役割は大きく、校長のリーダーシップや教職員の献身的な働きが開設当初の避難所に秩序をもたらした。自治組織の立ち上げを促したと高く評価された。

1 避難所となった学校の状況

(1) 学校施設の開設、避難者の受入れ

地震発生直後から被災者が学校に次々と避難してくるなか、教職員がまだ学校に到着していないというケースもあり、学校施設の開設と避難者の受入れは学校によって様々であった。

- <学校施設の開設と避難者の受入れの主なパターン>
- ・ 管理員、用務員、警備員が鍵を開け誘導
 - ・ 管理職が駆けつけ鍵を開け誘導
 - ・ 学校の近くに居住する教員が鍵を開け誘導
 - ・ 地域の学校開放委員が鍵を開け誘導
 - ・ 避難者がガラスを割るなどして体育館等に避難

多くの教職員が、自らも被災者でありながら、自宅の安全確認もそこそこに学校へ向かった。学校には既に住民が避難しており、早く施設を開放するように迫られるなか、学校施設の被害状況を点検し、どこを避難場所として解放するかなど、各学校で対応を判断していった。

しかし、被災地のほとんどの学校が数百人から2,000人程度の避難者を受入れるなか、とても体育館だけでは収容しきれず、次々に教室を開放することになった。中には、校長室や職員室など、学校の中核施設にまで避難者が押し寄せた学校もあり、それが本来の学校機能の回復が大幅に遅れる原因ともなった。

(2)避難所運営

避難所の設置及び運営業務は、本来、市町長の責任によって行われるべきものであるが、震災時には、市町の災害対策本部の設置や担当職員の避難所への派遣までにはかなりの時間的な空白があった。また、避難者の多くは茫然自失の状態であり、避難者の中にリーダーシップを期待することはできなかつた。こうした中、震災発生直後に学校へ駆けつけた管理職や一部の教職員が、混乱回避、秩序維持のため避難者への対応にあたった。

学校の避難所は長期に及ぶことになったが、それをいくつかの段階に分けて捉えることができる。

2 地震発生直後3日間の記録

被災地一帯で社会的機能が麻痺状態に陥り、引き続き起こる余震や各地で発生した火災から身の安全を確保し、水や食糧を確保することで精一杯の時期であった。着の身着のまま避難してきた人々は、寒さと空腹に耐えなければならず、救援物資、特に水や食糧の配給をめぐってパニックが起こりかねない状況であり、教職員には冷静な判断と果敢な行動が求められた。この3日間の状況を、西宮市立大社小学校の記録からたどってみる。

1995年(平成7)1月17日(火)

6時	近所の人が学校本館のガスの元栓を閉める。
7時	バスケットの朝練習を指導する教諭2名、職員室のガラスを割って体育館の鍵を取り、玄関を開け、テレビ2台を設置する。
7時30分	校長出勤。 避難者約100人。
8時30分	満池谷貯水池付近住民に避難命令。
9時30分	教頭出勤
10時	体育館に避難住民が入りきらず、教室等を開放。(管理室・特別教室を除く) 救命救助を最優先にする。 会議室を遺体安置所とする。 元市長、卒業生の悲しい姿あり。絶句。 避難者の中の3人の医師が保健室で救護活動をはじめ(～19日)。
15時	避難者自ら志願して職員室へ十数人のボランティア集まる(自治活動の芽生え) 初めての食糧配布。 ・救援おにぎり(2人に1個)、買い出しバナナ(1人に1本) 夕方 1家族1枚、個票を配り、〔住民票〕作成に取りかかる。
19時	避難者約1,800人。
22時	避難者約2,000人。 3年生男子児童1名の死亡確認(祖母とともに)。 一日中救出要請があった。 遺体が搬入され、1階会議室に安置する。(～23日、17遺体)線香立て、ふとん、畳、棺、ドライアイス、検死、火葬場の準備で右往左往する。 電話に一日中長い列(2本のうち1本は緊急用に確保)。 (勤務職員32名、宿直2名)

1月18日(水)

15時	<p>避難者数が約2,400人となる。</p> <p>部屋ごとの班編成、避難所名簿づくりの準備に取りかかる。</p> <p>午前「おにぎり3000個大作戦」展開。米、水、電気炊飯器を調達。</p> <p>おにぎり完成。各部屋(班)代表が配布作業(自治活動の芽生え)。班編制の基礎となる。</p> <p>遺族の方より遺体安置について不安、要望多く出る。</p> <p>児童の安否確認を最優先にと職員室黒板に指示。</p> <p>民間(個人・企業)から救援物資が多数届く。</p> <p>夜にボランティアリーダー職員室ミーティング。</p>
21時	<p>(1)班編成</p> <p>(2)トイレ掃除当番制</p> <p>(3)弁当などの配給システム</p> <p>(4)電話当番などの生活のルールづくりとボランティアの役割分担確認。</p> <p>(生活のルールは『お願い』として1月25日プリント発行)</p> <p>1年生女子児童の死亡確認(父、妹とともに)。</p> <p>職員室の床に雑魚寝始まる。</p> <p>(勤務職員32名、宿直2名)</p>

1月19日(木)

9時	<p>避難者約1,000人。</p> <p>避難所生活と運営システムがほぼ確立。班組織として29班が決定。</p> <p>運動場に駐車場用の白線。</p> <p>掲示板用の伝言板設置。</p>
19時	<p>満池谷町で火事。</p> <p>プールの水を防火用に確保しておいたことが活かされた。</p> <p>トイレの汚物処理は、水なし法で継続(トイレ当番制)。</p> <p>保健室に24時間体制救護所が開設された。</p> <p>ようやく学校再開が管理職の話題となる。</p> <p>最初の炊き出しボランティア(豚汁・大阪市立平野小学校)。</p> <p>緊急事態対応スタッフのなかからボランティアリーダーが生まれる。</p> <p>(勤務職員32名、宿直2名)</p>

多数の避難者を受け入れた避難所では、たちまちトイレや食糧をめぐるトラブルが発生した。

トイレ

地震によるライフラインの途絶のためトイレの水が流れず、当日のうちにつまって使えなくなった学校も多かった。プールの水をバケツに汲み置くなどしたが、多数の避難者には到底対応できず使用不能の状態に陥った。学校によっては、校長や教職員がビニールをつかって汚物を手で処理したところもある。こうしたことがきっかけになって避難者の間に自分たちで何とかしなければならぬという機運が生まれ、当番制でトイレ清掃を担当するなど自治組織誕生の萌芽となった。

また、校庭には仮設トイレが設置されたが、数が十分ではなく、校庭に穴を掘って簡易トイレをつくるなど苦勞は絶えなかった。

食糧

避難所に救援の食糧が届いたのは、当日夕方から夜にかけて、遅いところは翌日になった。しかし、やっと届いた食糧や水は、避難者全員に分配するには十分ではなかった。限られたパンを高齢者や幼児に優先的に配ったり、ソーセージを避難者の人数に細かくちぎって平等に分配したりした。また、絶対量があまりにも少なくて分配を断念したところもあった。食糧の分配にあたって、教職員は混乱を回避するために細心の注意を払い、リーダーシップを発揮した。

当初、食糧の配給はすべて教職員が行っていたが、その後、避難者の中から何人かが手伝うようになり、配給のための班分けを行うなど、自治組織ができるきっかけとなった。西宮市立大社小学校では、当初の数日を除き、避難所運営に関係した事柄は、校長、教頭が一手に引き受け、教員は子どもたちの教育とケアに専念できるように体制を整えたが、これには、避難者による自治組織の確立が不可欠であった。

地震から数日を経て、水や食糧が少なくとも量的には確保されるようになり、ボランティアの活動も本格化してくると、避難者も落ち着きをとりもどしつつあった。こうした中で、避難所となった学校では次第に避難者による自治組織がつくられていった。

避難者の中に良きリーダーが得られたというところではリーダーを中心に自治組織つくられたが、そうでない場合には、コーディネーター役を果たせるボランティアなどの支援を受けながら徐々に自治組織を形成していった。教員がかかわりながら避難者による自治組織が避難所運営を行った場合、その後の学校再開が比較的スムーズに進んだ。

「震災を超えて - 教育の創造的復興 10年と明日への歩み - 」兵庫県教育委員会
第 部 第 1 章 第 1 節「災害時に学校の果たす役割」より抜粋 (P.46 ~ P.48)

発達段階	中学校	教科等	総合的な学習の時間		
タイトル	私たちの防災力を高めよう - みんなで災害と闘おう -				
実施日(月日)					
所要時間	1時間	3時間	4時間	3時間	2時間
展開	課題認識	課題解決のための計画づくり	調査・話し合い	発表の準備・発表・まとめ	振り返り
達成すべき目標	地震災害によって起こる被害の状況や復興に向けての取組の様子から、私たちの防災力を高めることの課題意識をもつ	「私たちの防災力を高めよう」というテーマをもとに、具体的に課題と課題解決のための計画を設定することができる	・計画にしたがって、防災力を高めるための方法について調べたり、話し合ったりする ・インターネットや書籍、専門家などから必要な情報を収集する ・課題解決防災力を高めるための方法についての認識を高める	各グループごとに発表し、交流する	発表を振り返り、分かったことや気づいたことをまとめたり、実践化への意欲を高める
生成物	地震災害やその備え、復興に対する関心や課題意識の高まり	・防災力を高めるための課題の認識 ・課題を設定する力	・課題を追求する力 ・人間関係力 ・情報を活用する力	・表現する力 ・防災力を高めるための方法についての認識	・自分の学習や生き方への振り返り ・自分に出来る災害に対する備えの大切さの再確認と行動化への意欲
学習単位	全体	グループ	グループ	全体	個人・全体
進め方	ビデオや写真、ゲストティーチャーからの話などを通して阪神・淡路大震災や新潟県中越地震の被害や復興までの取組を知り、防災力を高めることの必要性についての意識を高める。 被害の大きさ、備えの大切さ、災害時の行動、復興の様子などの幅広い観点で進めていきたい。	「私たちの防災力を高めよう」というテーマをもとに、具体的に課題と課題解決のための計画を設定する。 「災害への備え」「災害時」「復興に向けて」などの視点で、具体的にテーマを設定させたい。 また、単に調べるだけの学習に終わることのないよう、防災力を高めるために自分たちができることを考えて実行しようといった課題設定ができるようにしたい。 (例) ・「地震への備え10か条」をつくらう。 ・「あっ地震だ！ そのとき、何をどうすれば」マニュアルを作らう。 ・幼児向けの防災紙芝居を作らう。 ・「私たちの地域の避難所づくり」プランを考えよう。	各グループごとに計画に沿って調べたり、話し合いを進めたりする。 人と人とのつながり、「もの」と「ところ」の両面からの復興の大切さ、災害の教訓を生かすことの大切さといった視点で、調べたり人と出会ったりすることができるよう、助言などを行う。特に、災害に遭遇した経験のある方や復興に取り組んだことのある方との出会いやその思いを知ることなどは、生徒にとって意義深いものとなる。	各グループごとに工夫しながら発表する。 ・発表を聞き、相互評価をするとともに、学習成果をまとめる。 ・防災力を高めるための方法について認識を広げ、深める。 発表に当たっては、実物やビデオ、写真、コンピュータなどを使うなど、内容に応じた説得力のある効果的な発表ができるような工夫をさせたい。 また、導入で招へいしたゲストティーチャーなどを再び招へいし、発表を聞いていただいて感想や意見をいただくのも効果的である。	・学習を振り返り、分かったことや気づいたことを交流する。 ・実践化への意欲を高める。 ・日ごろからの人と人との心のつながりが、災害時の救援・支援の大きな原動力になることを確認し合う。
ツール(準備物)	講義用機材	調査に必要な場所、人材、資料、県内企業等	調査に必要な場所、人材、資料、県内企業等	発表用のツール	振り返りシート
場所	視聴覚教室等	教室等	教室等	視聴覚教室・コンピュータ室等	教室等